教師の秘伝
その3

はじめに

秘伝３は、『生活の問題解決の話し合いで、社会性を発達させていく集団づくり』です。集団を教育の最も有効な「場」として機能させていきます。 秘伝３の内容は、２部で構成しています。

前半は、自分達の生活の中で起こる問題を、みんなの問題として、共有化をして、話し合いで解決して、よりよい生活をつくりあげていくことを目指すものです。

後半は、実行委員を中心に、みんなのアイデアを出し合い、学校生活を豊かにする活動を考え、みんなで協力してやり遂げることをめざす取り組みです。実行委員は、企画、運営の中心になり、リーダーとしての役割を学びます。実行委員以外は、集団の一員として、 協力してやり遂げることの大切さを学びます。

下記の態度や力を養うことを目指します。

■折り合いを付けながら人と柔軟にかかわる力

■人に関わることの大切さや良さを理解し、自分や他の人を大切にして、協調して生きていこうとする態度や能力

■集団を形成して、よりよく生きるためのルールや規範を、自分達でつくることができる力

■リーダーとして、見通しを立てて、全体の意見を調整しながら、企画をしたり運営したりする力

■集団一員として、全体の向上を考え、協力して必要な働きをする力

以上の力は、集団の中でしか身に付けることができない社会性にかかわるものです。しかし、単に集団の中にいるだけでは身に付けることはできません。

教師の秘伝３は、上記の態度や能力を意図的・計画的に養い、将来、児童が主体的に生きられるようにするための基盤をつくるためのものです。有効に活用してください。

吉新　一之

教師の秘伝
その３

もくじ

第１章　生活の問題解決の話し合いで、児童の社会性を発達させていく
集団づくりの考え方・・・P4

P5　基本的な考え方
P6　問題解決の場
P7　人権が侵害されるような問題が起こったときの指導の手順
P8　問題が起こったときの話し合いの指導例
P　質問コーナー

第２章　児童の主体性や集団の成員として協力する態度、
自分たちで生活をよりよくする集団づくりの考え方・・・P9

P１０　基本的な考え方
P１１　実行委員を中心にした学年の活動の例
P１２　質問コーナー
おわりに

教師の秘伝３

第１章

生活の問題解決の話し合いで、児童の社会性を発達させていく集団づくりの考え方

全員で話し合い、認め合い、注意し合い、高め合う集団作り

（１）『生活の問題解決の話し合いで、児童の社会性を発達させていく集団づくり』

（２）『児童の主体性や集団の成員として協力する態度、自分達で生活をよりよくする集団づくり』の２つで構成されています。

（1）『生活の問題解決の話し合いで、児童の社会性を発達させてく集団づくり』

人は社会を形成して生きていきます。関係ないと思う人でも、どこかで接点があり、共同生活をしています。その共同生活では、多様な価値観、おかれている環境や状況の差異、そのときの状態などにより、トラブルが起こりがちになります。

このような時に起こる学校生活での問題を、みんなの問題として捉え、解決のための話し合いをして、解決していきます。そして、助け合いや規範があって、だれもが安心して、のびのびと過ごせる学級集団づくりをしていきます。

自ら問題を解決する体験を通して、問題に立ち向かい人と折り合いをつけながら解決する力を養い、社会性を発達させていくことも大切にしていきます。

学校教育は、集団生活を通して、体験をもとにしながら、下記の態度を養うことができる唯一の場ではないかと思います。

①自分達で話し合い、みんなにとってよりよい形で、問題を解決しようとする態度。

②相手のことも考えて、あたたかい気持ちで注意する態度

③注意されたとき、感謝して、素直に受け入れ、自分をよりよくしようと見直す態度

④トラブルがあったときは、進んで自分の言動を振り返り、見直そうとする態度

⑤柔軟に思考し、みんなの幸せを考えて、問題を解決しようとする態度

⑥トラブルを解決するために、問題提起して、解決に向けて努力する態度

基本的な考え方

学級には、生活経験や環境、学力、態度、価値観、家庭環境、生育歴の異なる様々な児童が集まっています。つまり、社会の縮図であり、小社会でもあります。

集団生活が基本となる学級生活では、必然的にトラブルが起こります。このトラブルが起こることがマイナスということではありません。トラブルが起きるからこそ、どうしてトラブルが起こるのかその原因について考えることができます。

また、そのトラブルを解決していくことで、解決する方法や解決することの大切さを学ぶことができます。助けたり助けられたりすることの大切さも、体験を通して学んでいくことができます。

社会生活をしていく上で最も重要なことを学べる場なのです。しかし、辛い思いをしている児童が見過ごされてしまう集団では、学びはありません。そのような学級集団の中で、過ごさせるのは、たいへんかわいそうなことであり、許されることではありません。

正義があり、助け合いがあり、だれでもあたたかく受け入れられて、最終的に全員がよくなれる集団でなければなりません。学校生活の中で起きるトラブルは、全体の問題として、取り上げ解決していくことで、このような集団作りが可能になるのです。

トラブルの解決では、教師が注意したり叱責したりして、相手に謝らせて終わってしまっては、指導にはなりません。教師の価値判断で行われるだけなので、厳しすぎる、優しすぎるなどの問題が残ったり、教師がいないところで、同様の問題が起こったりすることもあり得ます。

そうならないためにも、トラブルを学級全体の問題として、全員が受け止め、話し合い、全員にとってよりよい解決の仕方ができる『場』の設定が重要になります。

この『場』があるからこそ、学級のだれもが差別されずに安心してのびのびと過ごすことができるのです。辛い思いをしている児童がいたら、みんなが助けてくれる場として機能しているか、学級経営の最重要事項として、心配りをする必要があります。

注意されたら、自分をよくするためにしてくれたことと理解し、注意してくれたことに感謝して素直に受け入れ、自分を改められるようにしていくことが、『全員で話し合い、認め合い、注意し合い、高め合う集団』づくりの基盤になります。

気をつけたいこと

行動が遅かったり、理解するまでに時間がかかったりする子は、周囲の子に注意されがちになります。これがエスカレートしていくと、まわりはその子をよくしようと思っていても、本人にとっては、いじめられているのと同じになってしまいます。相手の実態を理解した、あたたかい注意の仕方ができるようにしていくことは、まず先生が努力するところです。その子が生かされる注意の仕方・だれでも受け入れられるあたたかい集団づくりは、基本であり、もっとも大切なところです。

学級全員での話し合いと集団づくり

〇全員で良いこと悪いことを話し合うから、学級集団の規範ができます。

〇個人の問題以外は、学級全体の話し合いで極力取り上げ、考えさせていくことが大切です。

〇級友に迷惑をかけたとき（ばかにする・いじめる・暴力・差別・仲間はずれ・靴隠しその 他）は、全体の問題として取り上げ、話し合います。まず被害を受けた側の人権を優先す ることです。それには、二度と同様のことをさせないようにすることです。

【教師の安全配慮義務を果たします。】

〇二度と同じ行為をさせないためにも、自分がした悪い言動を相手がどう感じていたのか、 他の級友もどう思うのか現実を知らせることで反省させることが大切です。

問題を共有化する

学校は、多様な個性・生活経験・価値観を持った児童、体力・能力・発達・家庭環境の差異がある様々な違いのある児童の集合体です。その児童が学級や学校で共同の生活をして、一緒に物事に取り組むことになります。すると、様々な場面で、軋轢が生じてきます。

これらの問題を放置しておけば、集団としての規範や高まりは期待できません。そして、さまざまなトラブルや差別や仲間はずれ、いじめなども起こってきてしまいます。自分さえよければいいという雰囲気が蔓延してしまい、他の児童が苦しんでいてもかかわってなんとかしようとする児童もいなくなってしまいます。

これでは、いくら学習を進めても、全く教育していないのと同じです。教育者として、教育をしていないばかりでなく、教師に課されている安全配慮義務を果たしていないということにもなります。

このような集団にならないためにも、軋轢を『全員』の問題として捉え、『全員』の力を合わせて解決していくことが大切です。そして、問題解決をすることによって、人との望ましいかかわり方や自分達で自分達の生活を向上させることを体験し、児童は社会性を発達させていくことが重要です。

そこで、『全員』の「話し合い」を通して自分たちの生活上の問題を解決したり、「折り合い」をつけたりして自分たちの生活を向上させることをめざします。助け合いがあり、あたたかく受容的で、個を伸ばす学級集団であるとともに、悪い点を注意し合い改めるように働きかけることができる規範意識の高い集団にしていくということも大切です。そして、どの子も、安心して、のびのびと楽しく過ごせて、自分の力を十分発揮できる学校づくりをめざします。

【重要】注意するとき・注意されたとき

これまでにも記述してきたように、集団生活をしていればトラブルが起こることは当然です。そんなとき、自分達で解決する力をつけていくことが、将来自分達で社会をよりよくしていく力をつけることにつながります。

気が付かないうちに人を傷つけしてまったり、ルールを忘れて守れなかったりすることもあります。そんなときに、互いに注意し合って、注意されたことを受け止め、反省して自分をよりよくするための努力ができるようになれば、すばらしい集団ができます。そのためには、以下の３点が基盤となります。

①注意するとき

注意するのは「その人をよりよくするため」、「相手のことを思ってのこと」が前提となります。注意した子の前向きな態度を認めて、何もしない子よりすばらしいということを理解させます。注意の仕方で、本人が非難されたり、いやな思いをしたりしないように教師はフォローすることも大切です。

②注意されたとき

「注意されることは、自分がそれを直せばよりよくなることに気づかせてくれた」ので、教えてくれた相手に「ありがとう」と感謝して、それを改めるための努力ができる態度を身につけさせることが必要です。

※「やったのは自分だけじゃないのに、どうして注意されるのか。」「おまえもやったことあるだろう。」などのすり替えや詭弁は絶対に通さないことです。

③自分を振り返る

トラブルがあってはっきりしないときは、まず自分に何か悪い点はなかったか振り返りなさいとじっくり考えるように指導します。「〇〇さんが最初に〇〇をしたから」など言い訳をしないようにさせることが大切です。何か指摘されたときは、まず自分に悪い点がなかったか、振り返ることができる児童に育てていきます。

話し合いで問題を解決していく場の設定

学級生活に関する諸問題は日常起こるので、子どもの意識が切実なうちにいつでも「問題を取り上げてもらえる場」が必要です。児童が問題に気づいたとき、児童が問題提起して、全員で話し合って解決できる場を、学級につくっておきます。

①『毎日の問題の解決の場』を設定します。
【帰りの会の中に入れておくことも１つの方法です。】

②児童から、解決の場に、問題提起できるようにします。

③問題提起や問題解決の方法を学ばせます。

④問題を持ち越さないで、すっきりして家に帰れるようにします。

但し「話し合いで言ってやるぞ!」など脅迫の場にならないように留意し、その場で児童が注意して済むものは、それで終わらせた方がよいことを教えます。

秘伝の鍵

生活の問題解決の話し合いは、『だれが良いだれが悪い』ではなくて最終的にみんなを良くするためのものです。生活の問題を話し合いで解決できる集団作りをして、児童の社会性を発達させることを目指します。

どの子も受け入れる

能力差や違いを、個性や個人差としてみんなが受け入れて、個に応じた接し方や伸ばし方ができる児童になれるように、『優しさや思いやりのあるかかわり方』を大切にする学級集団づくりを目指します。

受容的な雰囲気がある

失敗や間違いはだれにでもあるので、それを批難するのではなく、悪い点をその子のために改めさせて、みんなで仲良く過ごすことができる雰囲気を学級に定着させていきます。

褒めあうことができる

級友のよい言動に気づいたときは、進んで認めて褒めることができるようにします。教師は、人を認める児童の言動を褒めて、そのことが良いことだという雰囲気を集団の中につくっていきます。

助け合いがある

困っていたりいやな思いをしたりしている級友がいるときは、助けるための積極的な働きかけができるようにすることが大切です。問題提起されたら、学級全体の問題として捉えて、全員が自分とのかかわりがあるということを前提にしながら、解決に向けて真剣に話し合い、具体的な行動ができるようにします。

指導の一貫性を大切に

よくない言動に気づいたとき、全職員が見過ごさないで指導することが重要です。うるさい先生、そうでない先生と児童が使い分けするようになると、指導を心から受け止められなくなってしまいます。

指導の連携を大切に

担任以外が児童を注意した場合、担任に状況を伝えます。伝えられた担任は感謝の気持ちを持って聴きます。そして、児童の実態に応じた指導のフォローをして、指導してもらったことが生かされるようにすることが大切です。

児童の人間関係づくりを大切に

児童の人間関係作りについても、支援するのは、教師としての大切な役割です。望ましい人間関係により、児童はよりよく育っていくからです。孤立してしまうのは、「その児童の性格の問題」として終わってしまっては、その子に対して、教育を放棄している事になってしまいます。また、孤立させる周囲に対しても教育を放棄していることになってしまいます。これでは、教師としての大切な役割を果たしていません。休み時間など、児童が自由に過ごしている様子も把握して、教師が望ましい人間関係作りの支援をしていくことで、助け合いがあり、あたたかく受容的で、規範があり個を伸ばす学級集団づくりができてきます。

キーワード

◎学級に、話し合いで問題を解決する場があります。

◎問題を共有し、みんなで解決方法を考えられます。

◎問題点や嫌なことを，自分で問題提起して、解決しようとすることができます。

◎学級内の規範意識を高めます。正義のある学級づくりをします。

◎誰が悪いどちらが悪いを判定する裁判のような場ではなく、みんなをよくする場です。

◎助け合いを大切にする学級にします。

人権が侵害されるような問題

①問題点や悪い言動について、解決するために話し合う確認をします。

◇「傷つくことを言われた・ばかにされた・いじめられている・暴力をふるわれた・差別されている・仲間はずれにされている・くつを隠された・その他」などの重要な問題は、時間をとって全員の話し合いではっきりさせて、極力その日のうちに対処することが大切です。
★とにかく被害を受けた児童を守ることを何よりも優先します。

◇暴力・差別・いじめ・仲間はずれ等の重要な問題の司会は教師が行う必要があります。
【焦点がぼけないようにします。】

②何が問題なのかはっきりさせていきます。

◇名前を挙げられた児童はその場に『立たせる。』場合もあります。→【当事者として自覚させるためです。】

◇状況をはっきりさせるためには、当事者に「場面を再現させる」ことも効果的です。

◇場面をはっきりさせていくことで、その過程があるから知らない子も話し合いに参加できるようになります。

◇時間がかかりすぎる集中できなくなってくるので、常に全体の雰囲気に配慮して、効率的に進めます。

◇人ごとのようにして集中していない児童は、見逃さないで、自分と関わりがあるということとを理解させていきます。

③問題をつくっている当事者がいるときは、本人に理由を確認します。

④問題に関係している児童がいるときは、話を聞いていきます。

◇その問題に気づいていた子にも発言させます。
（どう感じていたか伝えさせることが大切です）

⑤状況が確認できたら、『学級のみんながどう思うか』聞いていきます。

◇学校生活や友だちとの関わりの中で起こった問題は、『いずれ自分に関わってくる可能性』もあるということを理解させ、当事者意識（みんなの問題として）を持たせるようにして話し合いを進めることが大切です。

◇いろいろな角度からより多くの子の考えや思いを引き出すことが大切です。

◇問題を初めて知った子にも、どう思うか発言させる。
（かかわりを意識させる・問題の客観化にもつながります）

◇話し合いが進まないときは、「見た人はいませんか？このままでいいのですか？」など教師が積極的に働きかけをすることが大切です。

が起こったときの指導の手順

⑥当事者は、これからどうするか、発言させます。

◇ここでしっかり反省させることが大切です。

・良くなかったところを、みんなの前ではっきりさせます。

・悪いところはみんなの前で謝らせます。

・これからどうする具体的に言わせて、みんなの前で約束させる。

⑦これからみんなでどうしていくことが大切か話し合います。

【重要】「注意されて損をした。」「嫌な思いをした。」で終わらせないことが一番大切です。「良かった。気付かせてもらって。」これから直して、自分自身のため・みんなのためによりよくなろうという気持ちを持たせることが次へつながっていきます。

『その子をよくするため』に話し合いをしたのであり、『見せしめやつるし上げの場ではない』ことに特に留意します。互いに高め合う場であり、言動を問題するところであり、その人間性を否定するところではありません。

◇特定の児童ばかり問題があるということで話し合いに取り上げられているときは、悪い点を 改めさせることを確認してから、『みんなが受け入れている』ことや『良くなれるという気持ち』を持たせるように教師がフォローしていくことが大切です。

『話し合いは、最終的には、暖かい雰囲気でおわる』ように常に配慮する必要があります。攻撃して、誰かを悪者にして終わるようになっては、人権侵害になり、やらないほうがよいものになってしまいます。あたたかく受容的で規範のある集団づくりのために行うものです。

◇常に、話し合いは本人がよりよくなるために必要なこと、本人とみんなのためにしていることという意識を持たせることが必要です。そして、望ましい人間関係を築く力や社会性を身につける場として機能させていくことです。

◇話し合いに取り上げられた子の様子が気になるときは、保護者に指導したことを伝えておきます。このようなことがあり、フォローしましたが家でも励ましてくださいなど知らせます

問題が起こったときの話し合いの指導例【司会は担任】

担任(司会)：困っていることがあるというので、みんなで解決してもらいます。

児童：「〇〇さんと〇〇さんは、いつも自分のことをあだなで●●と呼ぶのでやめてほしいです。」

紙に書いて、議題箱のような物をクラスに用意しておき、問題提起できるようにもしておきます。

この問題提起されることを事前に教師が知っている場合、本人の気持ちを聴いておくことが大切です。

担任(司会)：質問ありますか。

児童：「だれに言われていたのですか？」

児童：「あだなで呼ばれて、どんな気持ちだったのですか？」

児童：「やめてと言ったのですか？」

担任(司会)：他の人は、そのように呼ばれているのを、聴いたことがありますか。

児童：「あります。みんな言っていました。」

児童：「〇〇さんと〇〇さんがよく言っていました。」

担任(司会)：それを聴いていた人は、どう思っていましたか。

児童：「本人が嫌だと言っていなかったので、そう呼んでいいんだなと思っていました。」

児童：「言われて嫌じゃないかなと思っていたけど、何もできませんでした。」

児童：「注意したけど、そのまま続いていました。」

担任(司会)：〇〇さんは、なぜ、あだなで●●と呼んでいたのですか。

児童：「〇〇さんが呼んでいたからです。」

児童：「嫌がっているとわからなかったからです。」

児童：「気軽に呼んでいました。」

担任(司会)：みんなは、今の〇〇さんのあだ名で呼んでいた訳を聞いて、どう思いましたか。

児童：「本人が嫌だと分からなかったので、しかたがないと思います。」

児童：「本人がそう呼んでいいか聴いた方が良かったと思います。」

児童：「聴かれても本人が嫌だと言えなかったり、だんだん嫌だなと思うようになることもあります。」

児童：「他の人が呼んでいたからといって、まねをするのはよくないと思います。」

担任(司会)：〇〇さんは、これからどうしますか。（あだなで●●と呼んでいた児童）

児童：「嫌がっているということが分かったので、これからやめます。」

担任(司会)：〇〇さんは、自分が嫌な思いをさせていたことに対してどうしますか。

児童：「嫌な思いをさせたので、謝ります。もう言いません。ごめんなさい。」

担任(司会)：みんなは、これからどうすればいいですか。（ここが大切）

児童：「気がついたら、そのままにしないで、注意したいと思います。」

児童：「嫌な思いをしている人がいたら助けたいと思います。」

担任(司会)：〇〇さんは、これで大丈夫ですか。（あだなで●●と呼ばれていた児童）

児童：「大丈夫です。ありがとうございました。」

担任(司会)：〇〇さんは、もう嫌がることをしないから、よくなりましたね。

これでみんながよくなることができました。

担任(司会)：では、これからみんなで話し合ったようにすれば、安心して過ごせます。

何よりも、みんながよくなり、仲良くできることが大切です。

質問コーナー

Q：保護者が個別の問題なのにどうしてみんなの前で話し合うのですかと言ってきたらどうすればよいでしょうか？

当然プライバシーの問題は別ですが。ほとんどの問題は、集団生活をしているのですから、いずれ他の児童に影響を与える可能性があります。当事者や関係者にとどまる問題ではないということを繰り返し説明することが大切です。

Q：保護者がトラブルを直接担任に伝えて解決してくれと言ってきたら、どうすれば良いでしょうか？

保護者の訴え通りに、担任が動いていたら、大切な事実関係や本人の気持ち、周囲の児童の気持ち事実を見失ってしまうことが懸念されます。問題解決の場に、『児童から問題提起』させていることを伝えます。また、このことが、本人がトラブルを解決していくための学習となります。自分の問題を自分で解決するための働きかけをするというのも、大切な学習です。先生や親をたよっての解決では、その場限りです。

Q： 嫌なことがあっても、みんなの前で伝えられない子はどうすればよいでしょうか？

『自分から伝えられない子は、必ずいるはずだ』という意識を持って、教師は児童に接したり観 察したりすることが大切です。そして、その子が問題を抱えているときは、その子に応じた支援を 教師や周囲の児童がして、少しでも自分から働きかける部分を作り、解決していく体験をさせることが大切です。

Q：問題解決の話し合いの「終わり」で大切にしなければならないことは何でしょうか？

『自分から伝えられない子は、必ずいるはずだ』という意識を持って、教師は児童に接したり観察したりすることが大切です。そして、その子が問題を抱えているときは、その子に応じた支援を教師や周囲の児童がして、少しでも自分から働きかける部分を作り、解決していく体験をさせることが大切です。

Q：話し合いの場を有効にするために注意しなければならないことはどんなことでしょうか？

話し合いの場を絶対に形骸化しないようにすることが重要です。「言っても無駄だ、どうせ解決できない。言葉だけだ。」とならないように細心の注意を払うことが必要です。

Q：トラブルは、教師が個別に指導した方がよいのではないでしょうか？

先生の価値判断だけで、トラブルを解決していては、児童の心の中にすんなり入っていくことば かりではないと思います。周囲の子がどう受け止めているかも大切ですし、集団としての規範を作るためにも、みんなで問題解決することが必要です。

教師の良い働きかけ

「トラブルが起こったときは、まず自分を振り返り、直す点はないか考えられる人になってください。」
「注意されたときは、まず自分を振り返り直す点はないか考えられる人になってください。」
「この話し合いは何のためにしているのですか？全員をよくするためですよね。だれかを悪者にするためじゃないですよね。」
「注意されたことき直したら、誰が良くなるの？注意されたら、自分が良くなるんだから、感謝する必要がありますよね。」

※トラブルが起こったとき※
「まず自分を振り返って、良くなかった点を考えて言いなさい。」

※注意した後のフォロー※
「いろいろ注意されたけど、これは自分のためだね。直してよくなればいいんですよ。頑張りましょう。」

※トラブルを解決するとは、当事者、見ていた子も含めて、動作化させて確認します。口頭の説明で終わりにしません。分かりにくいときは、黒板も使って図解しながら、整理していきます。

終わりに

自分がしたことで「相手がどんなにいやな思いをしたか」、「その行為を周囲がどう思うか」を、級友に伝えられて、当事者は、たいへんつらいかもしれませんが、自分のしたことに責任をとり、反省して改めるためには必要な過程です、また、この事を通して、周囲に受け入れられるようにもなります。そして、これでみんなが仲良く楽しく過ごせるようになるという意識も高まります。

最終的に大切なのは、この話し合いが終わって、すっきりして、不安が解消して、家に帰れるようになることです。児童の対人関係が未熟なままでは、協力し合ってよりよい生活を築くことができません。社会性の未熟さが、いじめや不登校の一因にもなっています。これらの問題行動等を解決するためには、多様な他者と協力して生活上の諸問題を解決することを通して、望ましい人間関係を築く態度養い、自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てることが必要です。

児童に言語力や思考力、人とかかわる力を養い、自分の思いや考えを伝え合い、問題を解決していく経験を積み重ねていくことが、民主的な資質の育成のためにもたいへん重要なことだと思います。

第2章

児童の主体性や集団の成員として協力する態度、
自分たちで生活をよりよくする集団作りの考え方

(2)『児童の主体性や集団の成員として協力

秘伝の鍵

児童が、集団の一員として協力したり、リーダーとして活躍したりできる集団作りのための実行委員会

集団作りを通して、ある活動ではリーダー(実行委員)となり、別の活動では集団の成員として協力するという体験を積み重ねていくものです。

主体的に物事に取り組む態度を養う集団作り
集団の成員として協力する態度を養う集団作り
人とかかわるよさを体験させ、社会性を発達させる集団作り

実行委員会（学年の活動の企画・運営・調整の中心となり、リーダーとしての役割を学ぶ立場）

実行委員は、各学級代表が２人から３人で、合計８人ぐらいが活動しやすくなります。実行委員の役割が分からない段階では､リーダーシップがとれそうな児童を選出した方がお手本となり、今後につながります。いずれは、多くの児童に体験させて、リーダーシップがとれるようにしていくことが大切です。活動時間は休み時間が望ましいです。休み時間に遊べなくてかわいそうだという考えもあるかと思いますが、活動を充実させれば、休み時間を失うことに比較にならない貴重な体験ができます。

実行委員は、活動の企画・運営の中心となる役割を果たします。各学級の意見をまとめて、実行委員会に持ち寄り、整理してまとめていき、決定事項を各学級に伝達して、学級や学年を動かしていく役割を果たします。

学年の活動において、いろいろな場で実行委員会をつくり、主体的な取り組みがなされるようにすると良いです。例えば、遠足実行委員会、自然教室実行委員会、社会見学実行委員会、修学旅行実行委員会、学年の活動実行委員会等です。他にも学校の活動により、工夫ができるかと思います。

実行委員がすることは、活動内容によって多少の違いはありますが、リーダーとしてみんなをまとめること、つまり活動の企画・運営の中心になる役割を果たすことです。

良い集団の中では、良い児童が育つという視点から、主体的でまとまりのあるよい集団作りのためにも、実行委員の活動は効果的です。集団で何か行動するときは、自分達でならべる、静かに待っていることができるということが基本になります。実行委員の指示に基づいて、自分達で行動できる集団になることも大切なことです。

する態度、自分たちで生活をよりよくする集団づくり』

学年の活動（実行委員会を機能させる場）

楽しいことを児童が中心になり、企画運営して、やりとげることが大切です。リーダーとしての役割を学んだり、集団の一員としての協力することを学んだりしながら、自分達で自分達の生活をよりよくする体験をすることができます。保護者や地域の人たち、他学年の児童、当日参加できそうな先生を招待するとさらに充実します。

当日の成功が主目的ではありません。準備していく過程で学んでいくものが重要なのです。成功させるために、児童の主体性を損なってしまうようでは、この活動の価値はほとんどなくなってしまうということを頭に入れておくことです。例えば、下記のような親子学級対抗運動会、親子討論会『環境をテーマ』、カルタとり大会、隠し芸大会など、みんなで楽しめるものが、準備の動機付けが強くなります。全員をキーワードにして、準備していく中で、より多くのことが学べるようにしていくことで、この活動の価値が出てきます。仮に当日の運営が円滑でなく失敗したかなと思っても、児童に主体的な動きが見られれば成功です。失敗したという部分は、後日この点は次は改善しようと確認できれば、失敗ではなく学びとなっています。結果が良ければ全てよしではありません。教師は、何を学ぶことができたかを、冷静に捉えられるべきです。教育の一環であると言うことを忘れないようにしたいものです。

成功させることが最優先の目標となってしまっては、児童にとっても教師にとっても、窮屈な活動になってしまい、やらされ感の強いものになってしまいます。このような活動になってしまうのなら、かえってやらないほうが良いと思います。楽しみながら、多くのことを学べる、唯一の機会として実施するものです。

《実行委員会を中心とした活動の例》

討論　親子討論会　学級対抗運動会　親子ミニ運動会

学年集会　ミニ音楽界　かるた大会　朗読会　ミニ学芸会

実行委員を中心にした学年の活動の例

例えば、実行委員が各学級の希望を聞いて、『親子学年運動会』を開催することを決定したとします。

①第１回実行委員会は、実行委員の心構えと役割を教師が話します。次に、委員長・副委員長を選出します。みんながやりたいという雰囲気のもとに、選出の仕方を児童に決めさせて、選出させると良いです。

※教室に戻ったら、先生に相談して、実行委員会の後は、必ず『報告する時間』を取ります。（重要）

②親子学年運動会の目標をクラスで話し合って、動機付けをして雰囲気を作り、実行委員会で目標を調整して、決定します。（決定前に案として、各学級に持ち帰り、意見を聞いて最終決定という段階を踏むやり方も良いのですが、時間との兼ね合いから省略することも考えられます。）

③次に目標を達成するために、内容をどうするか実行委員会で話し合い、クラスに戻って、例えばということで話をしてから、みんなの希望を出してもらうと、話し合いが広がると思います。

≪内容例≫

〔開会式〕　はじめの言葉（実行委員）　実行副委員長の話（副委員長）　審判長の話（ルール・得点等、　注意事項）

〔種　目〕　親子綱引き（各学級　児童２０人　保護者２０人）

借り物競争（各学級児童１０人

保護者１０人）　二人三脚（各学級　児童１０人　保護者１０人）

リレー（各学級　児童　男女各４人）

障害物競走（各学級　児童１０人　保護者１０人）

〔開会式〕　結果発表(審判長)　表彰式(実行委員)　実行委員長の話　保護者代表の感想　先生の話

終わりの言葉

④次に、実施するために必要な準備について実行委員会で話し合います。

進行その他（進行が円滑になるように、必要なことは自分達で判断して、進めます。）

招集係　前の種目の終わり頃集合を促し、競技の順番に並べます。入場の誘導をします。）

放送係（マイク・放送機器準備片付けプログラム放送ＢＧＭ）

応援係（運動会を盛り上げるため、各学級で応援団を結成します。）

得点係（模造紙で得点表を作り、当日記入していきます。）

表彰係（賞状・メダル作成）

用具・準備係（用具の事前点検・当日の準備・片付けの中心になります。）

招待状係（保護者への招待状を作成する。他学年の参加も計画するときは対象学年用招待状作成）

プログラム係（児童用、校内の他の先生を招待する場合対象の先生用プログラム作成）

⑤実行委員かでの決定事項の伝達をしながら、係ごとの打ち合わせ・準備時間をいつとるかも知らせます。全員が何かの係になって役割を果たすことが大切です。自分の仕事だけでなく、流れがうまくいくように、気付いことは進んで行えるようにします。

⑥保護者代表との打ち合わせも実行委員が行います。その後、教師と保護者の打ち合わせを行い、大切なところの確認と児童の説明で不足しているところがあれば補足します。

実行委員の活動内容例

≪遠足実行委員≫

全員の集合・整列の指示　出発と帰りの会の運営　しおりの作成　遠足の説明会の実施

≪自然教室実行委員≫

全員の集合・整列の指示　出発と帰りの会の運営　しおりの作成　遠足の説明会の実施

部屋割り　野外炊飯　オリエンテーリングのグループ構成の決め方の調整

質問コーナー

Q：実行委員は全員が体験できるように順番を決めておくとよいのでしょうか？

順番を決めておくメリットは、公平に実行委員の立場を与えやすく、児童がいつ実行委員をやるか分かるので、見通しが立って心構えができるというメリットがあります。学年の活動がしっかりと積み重ねられていくことで、学年の雰囲気も高まり、実行委員の役割も深く理解され、実行委員をやってみたいと思う児童が増えてきます。そのような高まり、思いに応えられるようにするためには、実行委員をその都度決めていくということもよいと思います。

Q：実行委員の活動時間は休み時間でよいのでしょうか？

ボランティア活動には、犠牲がつきまといます。その他の時間を取るのはたいへん難しいと思います。休み時間を失ったことよりも、価値のある学びができるはずです。

Q：実行委員へのかかわり方で注意することはなんでしょうか？

常に主導権は実行委員にあることを意識して、教師が主導権を無意識に奪わないようにすることです。（安全にかかわることは教師が主導権を握って指示したり注意したりすることは当然のことです。）

Q：実行委員がクラスに戻ったら何をすればよいでしょうか？

実行委員会を開いた後は、必ずクラスに戻ったら、先生にお願いして、実行委員会からの報告の時間をもらうようにさせます。実行委員会だけがやっているという雰囲気にならないように留意します。自分達の代表であり、自分達の考えを生かしてくれているという雰囲気が大切です。

Q：実行委員をやってよかったと思わせる工夫はなんでしょうか？

充実した活動にすること。主導権を持たせること。終了後、みんなの前で、賞賛すること。次は、集団の一員として、実行委員を支えることで力を発揮してほしいと確認すること等です。

終わりに

☆当日の運営が円滑にできたとしても、教師主導になってしまっては、児童にとってどんな学びがあったのか疑問に思います。当日の『出来映えという結果』ではなく、あくまでも児童の主体的な取り組みの『過程での学び』が大切です。

☆実行委員が前で話しているときや活動しているときは、実行委員に断ってから、教師が話をしたり指示をしたりするようにします。そして、それらが終わったら、「先生の話しは終わりましたから実行委員さんお願いします。」などと言って、必ず主導権を実行委員に戻すことです。実行委員から途中で主導権を奪って、教師の指示や話しから全体の児童に行動させてしまうと、実行委員は教師の指示待ちになってしまい主体的な取り組みや態度の育成はできなくなってしまいますので注意してください。

☆実行委員が前に立って、指示をすることが大切です。集合したときは、とにかく自分達で静かに並んで待つことができる集団にすることが基本です。お互い注意し合うことができるようにしておくことです。

教師の秘伝シリーズ①～③

平成２７年１２月１日
川崎市立川崎小学校
著　者　　吉新　一之
表紙・本文デザイン　　森谷　一仁
協　力　　渡辺　研

教師の秘伝